

若年層における現在志向が主観的ウェルビーイングに 与える影響

——生活満足度と主観的自由に注目して——

狭 間 諒多朗

1. 緒言

若年層の現在志向について、これまで多くの議論がなされてきた。現在志向とは「将来のために努力するよりも今現在を楽しむことを重視する態度」のことであり〔荻谷 2001；益田 2012 など〕、若年層の現在志向が強まっているということが繰り返しいわれてきた〔千石 1991；古市 2011 など〕。しかし、大規模調査データの時点間比較からは、若年層の現在志向は強まっていないことが明らかにされている〔狭間 2016〕。他方、その規定要因に目を向けると、現在志向が学歴によって規定されるようになり、学歴の低い若年層ほど現在志向が強いという学歴差がこの 20 年の間に生じたことが明らかになっている〔狭間 2016〕。さらに、現在志向が政治を人任せにする意識や格差拡大を容認する意識につながっており、学歴の低い若年層が、現在志向を持つことによって社会に対して声を上げなくなっている可能性も示唆されている〔狭間 2017〕。現在の若年層は、正規の職に就けない、結婚できない、収入が不安定、将来展望ができない、といった困難な状況にあることが指摘されているが〔宮本 2002；藤田 2016〕、とくに学歴の低い若年層にダメージが集中しているといわれている〔宮本 2002；堀 2007；乾 2010〕。本来ならば社会に対して異議申し立てを行ってもおかしくはないかれらが、将来のために努力するよりも今を楽しむ態度を身につけることによって社会に対して受け身になっている。学歴の低い若年層の社会に対する関心を高めるためには、かれらの現在志向を弱める形で現在志向の学歴差を解消しなければならないとされている〔狭間 2017〕。

そのためには、そもそもなぜ学歴の低い若年層の現在志向が強いのかを明らかにする必要があるだろう。考えられるのは、現在志向を持つことによって何らかのメリットを得られるような状況にかれらが置かれているのではないかということである。これまでの現在志向に関する議論をみると、現在志向を持つことが主観的ウェルビーイングを高めることにつながっているという指摘がある〔高坂 2014；豊泉 2010；古市 2011 など〕¹⁾。主観的ウェルビーイングとは、自らがよりよい (well) 状態 (being) にあるのかどうかについての自己評価である。本来ならば、困難な状況に置かれている学歴の低い若年層が自らをより良い状態であると評価することは難しい。もし現在志向を持つ

1) 主観的ウェルビーイング以外にも、自己有能感〔荻谷 2001〕や階層帰属意識〔狭間 2018〕についても現在志向が与える影響が指摘されている。

ことによって主観的ウェルビーイングを高めることができるのなら、そのためにかれらが現在志向を強めている可能性がある。しかしながら、次節以降で詳しく述べるように、現在志向が主観的ウェルビーイングに与える影響は厳密に検証されているわけではない。そこで本稿では、現在志向との関連が示唆されている生活満足度と主観的自由という2つの主観的ウェルビーイングの指標に注目し²⁾、現在志向が与える影響についてまず検証する。その後、学歴の低い若年層が現在志向を通して生活満足度を高め、主観的に自由を感じているのかどうかを検証する。

2. 先行研究

2.1 生活満足度を支える要因

近年、若年層の生活満足度の上昇に注目が集まっている。先述のとおり、現在の若年層は就業や家族形成、経済状況といった面で困難な状況に置かれている〔宮本 2002；藤田 2016〕。生活満足度に関する日本の先行研究をみても、男性において失業者や臨時雇用・パートアルバイトの人の生活満足度が低い〔小林 2008 など〕、結婚することで生活満足度が高まる〔脇田 2014 など〕、収入が多いほど生活満足度が高い〔小林 2008；橋爪 2016 など〕といった分析結果が報告されており、これらの知見に鑑みれば現在の若年層の生活満足度は低くなっているはずである。しかしかれらの生活満足度は上昇しているという事実がパラドックスとして伝えられた〔豊泉 2010；古市 2011 など〕。そしてこのパラドックスを解明するために、若年層の生活満足度を支えている要因に関する研究が行なわれている〔浅野 2015 など〕。

それらの研究の中に、若年層のコンサマトリーな意識が生活満足度につながっているとする指摘が存在する。ここでいうコンサマトリーな意識とは、「何かの目的に向かって頑張るのではなく、『今、ここ』で仲間と楽しく過ごすことを重視する」意識のことである〔古市 2011, 2013〕。このうち、「仲間と楽しく過ごすこと」が生活満足度を高めるという部分については、個票データの分析によって実証されている〔浅野 2015〕。しかしながら、コンサマトリーな意識のうち「何かの目的に向かって頑張るのではなく、今を重視する」こと、すなわち現在志向が生活満足度を高めているのかについては、データ分析による検証がされているわけではない。つまり、現在志向が生活満足度と与える影響については、いまだ推測の段階に留まっているといえる。そして現在志向が生活満足度を高めるメカニズムについては、次のように考えられている。

現在志向を持つことは、将来到達できるかもしれないより高い目標ではなく、今現在を大事にすることを意味する。高い目標に向かって努力している間は、その高い目標を基準に自らの生活を評価するために満足していると答えるのが難しくなる。逆にいえば、将来のことを考えずに今を楽しむようにすれば、自らの生活を評価する基準が下がり、結果的に生活満足度が高まる可能性がある〔豊泉 2010；古市 2011〕。他方、現在の若年層、とりわけ学歴の低い若年層が置かれている困難な状況を考えると、現在志向が生活満足度を高めるメカニズムだけに注目することはできない。益田仁によると、困難な状況における現在志向とは、「将来の生活に対する見通しに何ら希望がもてず、現在において将来のために努力したとしても何の見返りも期待できない」〔益田 2012：92〕がゆえ

2) 主観的ウェルビーイングは様々な要素から構成されている。具体的な構成要素については、Diener et al. [1999] や伏島ほか [2015] を参照されたい。

に生まれるという³⁾。現在の若年層の持つ現在志向が、このような状況から生まれているとするならば、現在志向が単純に生活満足度の向上につながっているとは思えない。以上の観点からも、実際に、現在志向を持つことが生活満足度を高めるかどうかについては、データ分析による検証が必要だろう。もし現在志向を持つことが生活満足度を高めているならば、学歴の低い若年層が生活満足度を高めるために強い現在志向を持っている可能性がある。

2.2 自由な生き方への注目

現在の日本社会ではライフコースが多様化し、自由な生き方が許されるようになった〔古市 2012〕。それにしたいが、近年では、オフィスを持たず自由に働く「ノマドワーカー」〔佐々木 2009〕や、生活水準を下げてでも自由な時間を重視する「ダウンシフターズ」〔Schor 1998=2000；高坂 2014〕といった従来の生き方とは異なる自由な生き方に注目が集まっている。現在の若年層は、そのような自由な環境で自らのライフコースを歩んでいかなければならない。

しかしながら、人々が手にする自由はその人の持つ資源や、置かれている立場、環境に依存する〔Sen 1985=1988；Nussbaum 2000=2005〕。つまり、自由な生き方が許されるようになったといっても、実際に全員が自由に生き方を選べるわけではない。そこで、自由に生き方を選べているのは誰なのかという、自由の不平等について研究する必要性が指摘されている〔内藤 2012, 2017〕。

そのような研究を行う際に、自由の指標として使用するべきとされているのが、本稿でも使用する「主観的自由」である。内藤準によれば、ある人が自由かどうかを客観的な指標によって測定することは難しく、主観的な評価によって測定されるべきだという〔内藤 2012, 2017〕⁴⁾。そして、自由な生き方を選択できることは人々にとってのウェルビーイングであるということを考えれば、主観的自由は主観的ウェルビーイングの指標の1つであるといえる〔内藤 2017〕。

これまでの研究では、学歴が高いことや配偶者のいないことが主観的自由を高めるといった、属性が主観的自由に与える影響が明らかにされているが〔内藤 2012, 2017〕、本稿ではそれらの属性に加えて現在志向が主観的自由に与える影響を検証する。というのも、より大きな目標に向かって努力するよりも現在を楽しもうとすることで、主観的自由を得られる可能性が考えられるからである。

山田昌弘によると、現代日本社会に暮らす若年層には個々人のストイックな努力が求められているという〔山田 2004〕。自己責任論の台頭によって、困難な状況から脱するために個々人が努力するよう求められているが、将来展望が難しい状況であるために、いくら努力してもよりよい将来が確実にやってくるとは限らない。したがって、困難な状況から脱してよりよい将来を得るためには、絶えず努力をし続けなければならない。つまり、現代日本社会では、よりよい将来を得るために、現在の快樂を大きく制限して努力し続ける必要性が高まっている。であるならば、将来のことを考えずに現在を楽しむようにすれば、ストイックな努力から解放され、そのときそのときを自由に生

3) 益田は、P. Willis の「ハマータウンの野郎ども」〔Willis 1977=1996〕や E. Liebow の「タリーズコーナー」〔Liebow 1967=2001〕といった、下層階級の人々が持つ現在志向に言及した研究を参照することで、困難な状況から現在志向が生まれる過程についてまとめている〔益田 2012〕。

4) 客観的に測定が可能な社会的資源があるとして、ある個人がその資源を豊富に所有していたとしても、それを使用して自由を得られるかどうかはわからない。なぜならば、ある社会的資源を保有することが人々の自由を拡大させるかどうかは人々の置かれた環境や立場に依存するからである。人々の自由を客観的な指標で測定することが難しい理由の1つに、以上のような自由の持つ性質がある〔内藤 2017〕。

きることができるのではないだろうか。また、先述の「ダウンシフターズ」と呼ばれる生き方は、より高い生活水準を得るために自由な時間を削って努力するよりも、たとえ生活水準が下がっても今現在の自由を重視するという生き方である [Schor 1998=2000; 高坂 2014]。このような生き方の背後には、将来のために努力するよりも今現在を楽しむことを重視する現在志向の考え方が存在していると推測することもできる。

以上の議論からは、困難な状況に置かれている現在の若年層、とりわけ学歴の低い若年層が、現在志向を持つことによってストイックな努力から解放され、主観的自由を得ている可能性が示唆される。しかしながら、現在志向が主観的自由に与える影響について検証した研究は存在しない。そこで本稿では、本当に現在志向が主観的自由に影響を与えているのかをまず検証する。そしてその後、学歴の低い若年層が現在志向を通して主観的に自由を感じているのかどうかを検証する。

2.3 本稿の検証課題

これまでの議論から、本稿で検証すべき課題を整理する。

まず、若年層において、現在志向がそもそも生活満足度と主観的自由という主観的ウェルビーイングに影響を与えているかどうかを検証する。そして次に、学歴の低い若年層ほど現在志向が強いという先行研究 [狭間 2016] を考慮し、学歴の低い若年層が現在志向を通して生活に満足し、主観的に自由を感じているのかを検証する⁵⁾。

これらの検証課題を仮説にすれば次のようになる。

仮説 1A：現在志向の強い若年層の生活満足度が高い

仮説 1B：学歴の低い若年層が現在志向を通して生活満足度を高めている

仮説 2A：現在志向の強い若年層が主観的に自由だと感じている

仮説 2B：学歴の低い若年層が現在志向を通して主観的に自由だと感じている

これらの仮説を検証するために、本稿では 2015 年に行われた大規模調査データを用いた計量分析を行う。

3 方法

3.1 データと変数

まず、本稿で使用するデータを説明する。本稿で使用するデータは「2015 年階層と社会意識全国調査」(SSP2015) のデータである。この調査は、日本全国に住む 20 歳から 64 歳の男女を対象に行われ、層化 3 段無作為抽出によりサンプルが抽出されている。調査は個別聴取面接法で行われ、3,575 人から有効回答を得た (回収率 43.0%)。若年層に注目する本稿では 20 ~ 34 歳の人々に限定し⁶⁾、分析に用いる変数が欠損値になっているケースを除いた、592 人を対象に分析を行う。

5) 現在志向は他の意識や行動を方向づける価値観、あるいは行動原理と捉えられること [狭間 2017]、先行研究では現在志向を持つことによって主観的ウェルビーイングが高まっていると説明されていることから [豊泉 2010; 古市 2011]、本稿では現在志向が主観的ウェルビーイングに与える影響を検証する。ただし、因果の向きを厳密に検証するには、クロスセクショナルなデータでは限界がある。今後はパネル調査などの新たな調査を行いながら、厳密な検証を行っていく必要があるだろう。

6) 何歳までが若者なのかという定義については、明確な決まりがあるわけではないが、T. Toivonen は、日本社会

次に、分析に使用する意識変数について説明する。現在志向については、「将来のために節約・努力するよりも、今の人生を楽しむようにしている」かどうかを尋ねた項目を使用する。回答選択肢は「よくあてはまる／ややあてはまる／どちらともいえない／あまりあてはまらない／まったくあてはまらない」の5つとなっている。この項目は、将来のための節約・努力と今の人生を楽しむことがトレードオフの関係に設定されている。したがって、この項目に肯定的に回答するほど「将来よりも現在を重視」しているということができる。分析に使用する際には、「よくあてはまる」=5～「まったくあてはまらない」=1となるように数値を与え、数値が高いほど現在志向が強いことを示すようにしている。生活満足度については、生活全般に満足しているかどうかを尋ねた項目を使用する。回答選択肢は「満足している／どちらかといえば満足している／どちらともいえない／どちらかといえば不満である／不満である」の5つとなっている。分析に使用する際には、「満足している」=5～「不満である」=1となるように数値を与え、数値が高いほど生活に満足していることを示すようにしている。主観的自由については、「私の生き方は、おもに自分の考えで自由に決められる」と思うかどうかを尋ねた項目を使用する。回答選択肢は現在志向と同じく「よくあてはまる／ややあてはまる／どちらともいえない／あまりあてはまらない／まったくあてはまらない」の5つである。分析に使用する際には、「よくあてはまる」=5～「まったくあてはまらない」=1となるように数値を与え、数値が高いほど主観的に自由を感じていることを示すようにしている。

最後に、分析で使用する属性変数について説明する。本稿で注目する学歴については、教育年数に変換し連続変数として使用する。また他の属性変数については、統制変数として性別、年齢、就業状態、収入、配偶状態を使用する。これらの変数は主観的ウェルビーイングを従属変数とする多くの先行研究でモデルに投入されているものである〔小林 2008；脇田 2014；内藤 2012 など〕。性別は男性=0、女性=1と値を与え、年齢はサンプリング時の満年齢を使用する。就業状態については従業上の地位を「正規職／非正規職／無職／学生」の4カテゴリに分類し、それぞれダミー変数を作成した。参照カテゴリは「正規職」である⁷⁾。収入には、対数変換を施した世帯収入を使用する。

表1 分析に使用する変数の記述統計

変数	割合 (%)		平均	標準偏差
性別 (女性)	53.4	年齢	28.0	4.3
正規職	54.9	教育年数	13.8	2.2
非正規職	23.5	世帯収入		
無職	12.5	対数変換前	588.1	615.9
学生	9.1	対数変換	6.1	0.9
有配偶者	45.1	現在志向	3.2	1.0
		生活満足度	4.0	0.9
		主観的自由	3.7	1.0
N	592			

出典：SSP2015 データより筆者作成

では 2000 年代以降に 34 歳までが若者であると定義されるようになったとしている〔Toivonen 2011=2013〕。本章でもその定義にしたがい 34 歳までを若者とした。また、本稿の分析で使用する SSP2015 調査データでは 20 歳以上の人々を対象に調査が行われているため、下限は 20 歳に設定している。

7) 「正規職」には「経営・管理」「正規雇用」「自営業」が含まれている。若年層では、「経営・管理」「自営業」の人数が少ないために 1 つのカテゴリに集約した。

配偶状態は、現在配偶者がいない場合=0、いる場合=1を与えた「有配偶者ダミー」を使用する。意識変数と属性変数の記述統計については表1に示している。

3.2 分析手順

最初に、今回の分析に使用する意識変数の回答分布を確認し、その後、各意識変数の相関関係を確認する。次に現在志向を従属変数とした重回帰分析を行い、学歴との関連を確認する。そして、現在志向を独立変数とし、生活満足度と主観的自由を従属変数とした重回帰分析を行う。最後に、学歴が現在志向を通して生活満足度と主観的自由に与える影響を確認するためにパス解析を行う⁸⁾。

4. 分析結果

4.1 回答分布

意識変数の回答分布は図1にまとめて表示している。1と2が否定的な回答、3が中間的な回答、4と5が肯定的な回答を示している。大まかに分布を確認すると、現在志向は肯定的な回答をした人が約40%とやや多くなっているが、中間的な回答、否定的な回答をした人も30%前後おり、バランスのとれた結果となっている。一方、生活満足度と主観的自由にかんしては、どちらも肯定的な回答をする人が非常に多くなっていることがわかる。

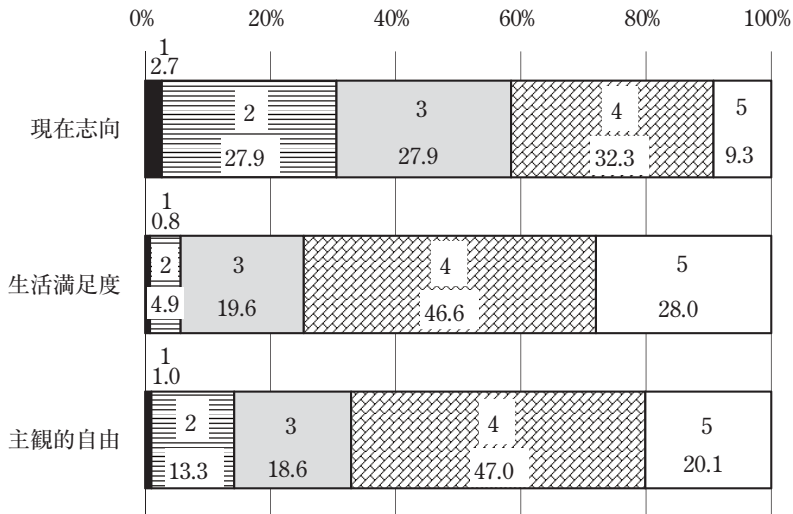


図1 意識変数の回答分布

出典：SSP2015 データより筆者作成

8) 相関分析、重回帰分析に使用したソフトウェアはIBM SPSS Statistics 22である。重回帰分析の結果は最小二乗法で推定した。またパス解析はM-plus7を使用し、最尤法で結果を推定した。

4.2 相関係数

続いて各意識変数間の相関関係を確認する（表2）。

現在志向に注目すると、主観的自由との間に正の相関関係がみられ、現在志向が強いほど主観的に自由を感じていることがわかる。一方で、現在志向と生活満足度との間には相関関係はみられない。生活満足度と主観的自由については、正の相関関係がみられ、生活満足度が高いほど主観的に自由を感じていることがわかる。ただし、この関係はそれほど強いものではない。

4.3 現在志向の規定要因

表3は現在志向を従属変数とした重回帰分析の結果である。

まず調整済み決定係数 R^2 値は .052（1%水準で有意）であった。教育年数に注目すると、有意な負の効果がみられ、教育年数が短い人ほど現在志向が強いという関連が確認できる（ $B = -.069^{**}$ ）。統制変数では性別（ $B = -.291^{**}$ ）と、有配偶者（ $B = -.264^{**}$ ）に有意な結果がみられる。この結果から、若年層において現在志向の学歴差が存在するという狭間 [2016] の結果を改めて確認することができる。

表2 意識変数間の相関係数

	現在志向	生活満足度	主観的自由
現在志向	1.000		
生活満足度	-.019	1.000	
主観的自由	.193 ^{**}	.104 [*]	1.000

注) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

出典：SSP2015 データより筆者作成

表3 現在志向の規定要因

	B	SE	β
定数	4.494 ^{**}	.495	
性別 (ref: 男性)	-.291 ^{**}	.091	-.142
年齢	.009	.012	.038
教育年数	-.069 ^{**}	.020	-.150
正規職 (ref)			
非正規職	-.072	.110	-.030
無職	-.182	.139	-.059
学生	.244	.170	.069
世帯収入 (対数変換)	-.054	.049	-.046
有配偶者	-.264 ^{**}	.097	-.128
調整済み R^2		.052 ^{**}	
N		592	

注1) B：偏回帰係数, SE：標準誤差, β ：標準化偏回帰係数

注2) ** $p < 0.01$

出典：SSP2015 データより筆者作成

4.4 生活満足度と主観的自由の規定要因

表4は生活満足度と主観的自由を従属変数とした重回帰分析の結果である。

生活満足度の結果をみると、調整済み決定係数 R^2 値は .110 (1%水準で有意)であった。教育年数には有意な結果はでていない。しかしながら、統制変数として投入した変数の多くに規定されており、性別 ($B = .325^{**}$)、年齢 ($B = -.026^{**}$)、非正規職 ($B = -.237^{**}$)、世帯収入 ($B = .114^{**}$)、有配偶者 ($B = .488^{**}$) に有意な結果がみられる。現在志向に注目すると、有意な値とはなっておらず、現在志向は生活満足度に影響を与えていないことがわかる。

主観的自由の結果をみると、調整済み決定係数 R^2 値は .089 (1%水準で有意)であった。教育年数に有意な結果がでており、教育年数が長いほど主観的に自由を感じているということがわかる ($B = .048^{**}$)。統制変数では有配偶者 ($B = -.301^{**}$) に有意な結果がみられる。現在志向に注目すると、有意な正の値がでており、現在志向が強いほど主観的に自由を感じていることがわかる ($B = .159^{**}$)⁹⁾。

表4 生活満足度と主観的自由の規定要因

	生活満足度			主観的自由		
	B	SE	β	B	SE	β
定数	3.137 **	.432		2.686 **	.488	
性別 (ref: 男性)	.325 **	.075	.188	-.059	.084	-.031
年齢	-.026 **	.010	-.127	.005	.011	.021
教育年数	.030	.016	.078	.048 **	.018	.112
正規職 (ref)						
非正規職	-.237 **	.090	-.116	-.097	.102	-.043
無職	-.193	.114	-.074	-.241	.129	-.082
学生	.130	.140	.043	.150	.158	.045
世帯収入 (対数変換)	.114 **	.040	.115	-.010	.046	-.009
有配偶者	.488 **	.080	.281	-.301 **	.090	-.155
現在志向	.032	.034	.039	.159 **	.038	.169
調整済み R^2		.110 **			.089 **	
N	592					

注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差, β : 標準化偏回帰係数

注2) ** $p < 0.01$

出典: SSP2015 データより筆者作成

9) 主観的自由については、自由に使える時間など、もっと実質的な要因によって規定されており、現在志向の効果はそれらの代わりにみられたものである可能性もある。そこで、若年層にとって自由な時間を制限する大きな要因であると考えられる子育てと労働の効果を検証し、現在志向の効果の変化について確認した。まず、子どもの有無をモデルに追加投入した結果、子どものいない人のほうが主観的に自由を感じているという結果がみられたが、現在志向の効果が減少することはなかった。次に分析対象を有職者に限定し、モデルに労働時間を加えた上で分析を行った。その結果、労働時間は有意な効果を持っておらず、現在志向の効果が減少することもなかった。これらの結果から、現在志向が主観的自由に与える影響は、少なくとも子育てや労働時間によるものではないことがわかる。

4.5 パス解析

これまでの分析結果からは、学歴が現在志向に影響を与えていること、現在志向は生活満足度には影響を与えていないが、主観的自由には影響を与えていることがわかった。本節では、パス解析を用いて、学歴が現在志向を通して生活満足度と主観的自由に与える影響を検証する。

最初に、生活満足度についてパス解析を行った（図省略）。その結果、そもそも現在志向が生活満足度に影響を与えていないため、学歴が現在志向を通して生活満足度に与える間接効果も有意ではなかった。

次に、主観的自由についてパス解析を行った。その結果が図2となっている。現在志向、主観的自由については、これまでの重回帰分析と同じく、性別、年齢、就業状態、世帯収入、配偶状態の影響を統制しているが、図の見やすさを考慮して図中には示していない。

まず、教育年数が主観的自由に直接与える影響が確認できる（.112**）。教育年数が長いほど主観的に自由を感じていることがわかる。一方で、教育年数が現在志向を通して主観的自由に与える間接効果も有意であった（ $-.150 \times .169 = -.025^*$ ）¹⁰。教育年数が短いほど現在志向を通して主観的に自由を感じていることがわかる。すなわち、教育年数と主観的自由の間には、相反する2つの経路が存在することが確認できる。

これまでの分析結果から得られた主要な知見を仮説にそってまとめると次のようになる。

まず、現在志向は生活満足度に対して影響を与えていなかった。そのため、学歴が現在志向を通して生活満足度に与える影響もなかった。したがって、「仮説1A：現在志向の強い若年層の生活満足度が高い」「仮説1B：学歴の低い若年層が現在志向を通して生活満足度を高めている」はともに支持されない。一方で、現在志向は主観的自由に正の効果を持っており、学歴が主観的自由に対して現在志向を通じた負の効果を持っていた。したがって、「仮説2A：現在志向の強い若年層が主観的に自由だと感じている」「仮説2B：学歴の低い若年層が現在志向を通して主観的に自由だと感じている」はともに支持された。

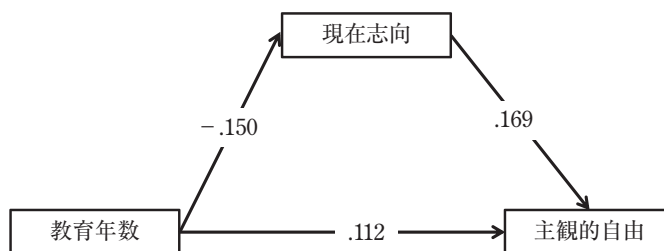


図2 パス解析の結果

出典：SSP2015 データより筆者作成

注) 図中の推定値はすべて1%水準で有意、標準化推定値

10) 間接効果の検定はブートストラップ法（ブートストラップ標本数2000）で行った。

5. 議論

5.1 コンサマトリーな意識と生活満足度

本稿の分析結果から、現在の若年層において、現在志向は生活満足度に影響を与えていないことがわかった。2.1 節でも述べたように、現在志向を持つことで評価基準が下がり生活満足度を高める効果と、将来の見通しがたらず現在志向を持たざるを得ない状況にあることが生活満足度を下げる効果が混じっているために影響がないという結果になった可能性がある。いずれにせよ、この結果はコンサマトリーな意識が生活満足度を高めるという議論に修正を迫るものである。仲間と楽しく過ごすことが生活満足度を高めることはすでに明らかとなっているが[浅野 2015]、将来よりも今を大事にする意識が生活満足度を高めているとはいえない。したがって、コンサマトリーな意識が若年層の生活満足度を高めると述べる際には、コンサマトリーな意識の人間関係的側面についてのみ言及するべきであり、現在志向については言及するべきではない。

5.2 学歴と主観的自由の間にある2つの経路

一方で、現在志向を持つことは主観的に自由を感じることはつながっていた。そして、現在志向に学歴差があるために、学歴の低い若年層が現在志向を通して主観的に自由を感じているということがわかった。ただし、学歴が主観的自由に与える直接効果を見ると、学歴の高い若年層が主観的に自由を感じている。つまり、学歴と主観的自由の間には相反する2つの経路が存在している。

学歴が主観的自由に直接影響を与える経路については、先行研究でも明らかにされている。20～79歳までを対象としたデータを分析した内藤は、学歴の高い人が主観的に自由を感じている理由として次の2点を述べている。1つは、学歴が職業選択などの際に「資格」の壁を除去し、人生における選択の幅を広げるため。もう1つは、学歴が選択のための能力や知識を与えるためである[内藤 2012]。若年層においても、同様のメカニズムによって、学歴が主観的自由に直接影響を与えていると考えることができるだろう。この直接効果は、高い学歴を獲得することで選択肢が増え、自由を感じることにつながっていることをあらわしている。裏を返せば、学歴の低い若年層は選択肢が少なく自由を感じるができない状況にあるといえる。

このような状況下で、学歴の低い若年層が主観的に自由を感じられる方法が現在志向を持つことである。将来のことを考えずに今を楽しむことでストイックな努力から解放され、そのときそのときの刹那的な自由を感じることができる。様々な側面で困難な状況に置かれ、将来展望が困難である学歴の低い若年層にとって、現在志向を持つことが主観的に自由を感じるという、主観的ウェルビーイングの向上につながっている。現在の若年層において、学歴が低いほど現在志向が強いという学歴差が存在しているのは、学歴が低いということによって自由を得にくい状況にあるかれらが、現在志向を持つことによって自由を得ることができるからだといえることができる。

5.3 壮中年層、1995年の若年層との比較

それでは、学歴が低いほど現在志向を通して主観的に自由を感じているという経路は、現在の若年層に特徴的なものといえるのであろうか。本節では、壮中年層、およびかつての若年層との比較を行う。

まず、壮中年層との比較を行う。本稿では20～34歳までを若年層と定義し分析を行った。そこ

表5 現在志向と主観的自由の規定要因（壮年層）

	現在志向			主観的自由		
	B	SE	β	B	SE	β
定数	2.819 **	.240		2.016 **	.236	
性別 (ref: 男性)	-.014	.048	-.007	-.047	.046	-.024
年齢	.009 **	.002	.083	.011 **	.002	.100
教育年数	-.022 *	.010	-.048	.045 **	.010	.099
正規職 (ref)						
非正規職	-.034	.056	-.015	-.053	.053	-.024
無職	-.008	.067	-.003	-.086	.064	-.032
世帯収入 (対数変換)	.040	.027	.035	.048	.026	.043
有配偶者	-.206 **	.055	-.085	-.382 **	.052	-.160
現在志向				.167 **	.020	.170
調整済み R ²		.013 **			.071 **	
N			2,226			

注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差, β : 標準化偏回帰係数

注2) * p < 0.05, ** p < 0.01

出典: SSP2015 データより筆者作成

で35～64歳の人々を壮中年層とし、分析を行った(表5)¹¹⁾。その結果、学歴と現在志向との結びつきは壮中年層でも存在した(B = -.022*)。また、現在志向と主観的自由(B = .167**)との結びつきについても若年層と同様の結果が得られた。ところが、学歴が現在志向を通して主観的自由へ与える間接効果は有意ではなかった。これは、学歴と現在志向との結びつきが若年層よりも弱いことに起因している。

次にかつての若年層との比較を行う。狭間[2016]では、1995年時点では学歴と現在志向の間に関連がないことが明らかにされている。狭間[2016]で使用した1995年SSM調査には主観的自由についての項目がないため、現在志向と主観的自由の関連については検証することができない。しかしながら、そもそも学歴と現在志向の間に関連がないため、学歴が現在志向を通して主観的自由に与える影響はないと考えられる。

以上の結果から、学歴が現在志向を通して主観的自由に影響を与えているという経路は、現在の若年層に特徴的にみられるものであるということが出来る。ポイントは学歴と現在志向の結びつきであり、この結びつきが強いがために、学歴が低いほど現在志向を通して主観的に自由を感じているという経路が現在の若年層に存在している。それだけ現在の学歴の低い若年層が困難な状況に置かれているということが示唆される。

5.4 本稿の意義と課題

本稿では、若年層における現在志向が主観的ウェルビーイングに与える影響を検証した。その結果、主観的ウェルビーイングを構成する指標のうち、現在志向は生活満足度には影響を与えていないが、主観的自由には影響を与えていることが明らかとなった。そして、学歴の低い若年層が現在

11) 壮中年層には学生が含まれていなかったため、分析から学生を除いた。また、間接効果の検定は若年層と同じくブートストラップ法(ブートストラップ標本数2000)で行った。

志向を持つことで主観的に自由を感じているという経路を発見した。学歴の低い若年層の現在志向が強いのは、そのことによってかれらが主観的に自由を感じることができるからだといえるだろう。ただし、現在志向を通して生活満足度を高めてはいないことから、現在志向を持たなければならない現状に満足しているわけではないこともわかる。本稿の意義は、以上のような若年層における現在志向の学歴差と主観的ウェルビーイングとの関連を明らかにできたことにある。

最後に課題を述べる。本稿では学歴、現在志向、主観的ウェルビーイングの関連に焦点をあてたために、その他の分析結果については議論できなかった。若年層の現在志向は性別や配偶状態によっても規定されており、また主観的ウェルビーイングを考える上でも、ジェンダーや結婚という視点をかかすことはできない。今後はこれらの視点を取り入れた新たな議論を行う必要があるだろう。

※本稿は JSPS 科研費 JP16H02045 の助成を受けて、SSP プロジェクト (<http://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/>) の一環として行われたものである。SSP2015 データの使用にあたっては SSP プロジェクトの許可を得た。また、本稿は、2020 年度南山大学パツヘ奨励金 I-A-2 の助成を受けたものである。

参考文献

【日本語】

- 浅野智彦 2015 「若者の幸福感は何に支えられているのか」『現代の社会病理』30：37-55.
- 橋爪裕人 2016 「非正規・失業と主観的 Well-Being——社会関係資本とリスクの観点から」『2015 年度課題公募型二次分析研究会 パネルデータを活用した就労・家族・意識の関連性についての研究 研究成果報告書』133-157.
- 狭間諒多朗 2016 「若年層における現在志向の時点間比較——若者の現在志向の正体」SSP プロジェクト事務局（吉川徹・伊藤理史）編『2015 年階層と社会意識全国調査（第 1 回 SSP 調査）報告書』SSP プロジェクト、47-53.
- 2017 「現在志向が若年層のおとなしさに与える影響」『ソシオロジ』62(1)：79-96.
- 2018 「若者の地位アイデンティティ——現在志向と宗教性の効果に注目して」数土直紀編『格差社会のなかの自己イメージ』勁草書房、46-64.
- 堀有喜衣 2007 「学校から職業への移行の変容」堀有喜衣編『フリーターに滞留する若者たち』勁草書房、31-99.
- 古市憲寿 2011 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.
- 2012 『僕たちの前途』講談社.
- 2013 「日本の『若者』はこれからも幸せか」『アステイオン』79：88-102.
- 伏島あゆみ・津田彰・田中芳幸、2015 「主観的ウェルビーイングの構成概念に関する理論的検討」『ストレスマネジメント研究』11(2)：84-98.
- 藤田孝典 2016 『貧困世代——社会の監獄に閉じ込められた若者たち』講談社.
- 乾彰夫 2010 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち』青木書店.
- 荻谷剛彦 2001 『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社.
- 吉川徹 2009 『学歴分断社会』筑摩書房.
- 小林大祐 2008 「階層帰属意識に対する従業上の地位の効果について」轟亮編『階層意識の現在』2005 年 SSM 調査研究会、53-66.
- 高坂勝 2014 『減速して自由に生きる——ダウンスターズ』筑摩書房.
- 益田仁 2012 「若年非正規雇用労働者と希望」『社会学評論』63(1)：87-105.
- 宮本みち子 2002 『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社.
- 内藤準 2012 「自由の規定要因とジェンダー不平等——階層測定単位に関する議論から」武川正吾・白波瀬佐和子編『格差社会の福祉と意識』東京大学出版、143-168.

———2017 「サポートネットワークの有効性に対する社会階層の効果」『理論と方法』32(1)：64-79.

佐々木俊尚 2009 『仕事するのにオフィスはいらない』光文社.

千石保 1991 『「まじめ」の崩壊』サイマル出版会.

豊泉周治 2010 『若者のための社会学——希望の足場をかける』はるか書房.

脇田彩 2014 「生活満足度と婚姻状況・就業状況との関連における男女差」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ』78.

山田昌弘 2004 『希望格差社会——『負け組』の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房.

【英語】

Diener, Ed, Eunkook M. Suh, Richard E. Lucas, and Heidi L. Smith, 1999 “Subjective well-being: Three decades of progress,” *Psychological Bulletin*, 125(2), 276-302.

Liebow, Elliot, 1967 *Tally's Corner*, New York: Little, Brown. (=2001 吉川徹監訳『タリーズコーナー』東信堂.)

Nussbaum, Martha C., 2000 *Women and Human Development: the Capabilities Approach*, New York: Cambridge University Press. (=2005 池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳, 『女性と人間開発』岩波書店.)

Schor, Juliet B., 1998 *The Overspent American: Upscaling, Downshifting, and the New consumer*, New York: Basic Books. (=2000 森岡孝二監訳・青木圭介・川人博・成瀬龍夫訳, 『浪費するアメリカ人——なぜ要らないものまでほしがるか』岩波書店.)

Sen, Amartya, 1985 *Commodities and Capabilities*, Amsterdam: Elsevier. (=1988 鈴木興太郎訳, 『福祉の経済学』岩波書店.)

Toivonen, Tuukka, 2011 “NEETs: The Strategy within the Category,” Goodman, Roger, Yuki Imoto, and Tuukka Toivonen, eds, *A Sociology of Japanese Youth*, London, Routledge (=2013 井本由紀監訳・西川美樹訳「ニート——カテゴリーの戦略」ロジャー・グッドマン／井本由紀／トゥーッカ・トイボネン編『若者問題の社会学——視線と射程』明石書店, 251-283.)

Willis, Paul, 1977 *Learning to Labour*, London: Ashgate. (=1996 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房.)

The Effect of Present-orientation on Subjective Well-being in Japanese Youth:

Focusing on Life Satisfaction and Perceived Freedom

Ryotaro HAZAMA

要 約

本稿の目的は、若年層における現在志向が主観的ウェルビーイングに与える影響を検証することである。主観的ウェルビーイングの指標として、生活満足度と主観的自由に注目し、現在志向との関連を分析した。また、学歴の低い若年層ほど現在志向が強いという先行研究の結果から、学歴が現在志向を通して主観的ウェルビーイングに与える影響も分析した。

分析の結果、次の3点が明らかとなった。(1) 現在志向は若年層の生活満足度に影響を与えていない。(2) 現在志向が強い若年層ほど主観的に自由を感じている。(3) 学歴の低い若年層が現在志向を通して主観的に自由を感じている。これらの結果からは、学歴の低い若年層が現在志向を持つことでストイックな努力から解放され、そのときそのときの刹那的な自由を感じていることが示唆される。

キーワード：若年層, 現在志向, 生活満足度, 主観的自由, 学歴